

## 平成19年度 富山県文化審議会〈委員意見要旨〉

日時：平成19年11月20日（火）午後1時30分～3時30分

場所：富山県民会館401号室

### 議事：文化の振興に関する施策の推進について

（会長）事務局から資料1から7までについての説明があり、19年度の県の取組みについてかなり確認できたと思います。これらの取組みについて、随分たくさん委員の方が協力しておられることを改めて知りましたが、大変素晴らしいことだと思います。

それでは文化振興に関する施策の推進について、委員の皆さんからご意見を伺いたいと思います。日ごろの活動からお気付きの点や、これからの平成20年度の予算に向けた要望、あるいは、既にかなり議論したことではありますが、短期・中長期に取り組むと良いと思われるような事業の提案など、いろいろなご意見を言っていただきたいと思います。

○ この資料の2番目に、「県立近代美術館の魅力向上に関する取組みについて」というのが出ておりますので、一言申しあげます。

5年ほど前かなと思います。近代美術館の将来について考えるという検討委員会がありました。そのときにも会合を4～5回持ちまして、どうしたら将来の近代美術館がよい方向に向かえるかということをもとめたことがあります。

検討委員会を開いていた頃、近代美術館は改修される前で今とはだいぶ様子が違っていました。その検討委員会で、県の作家をもう少し重点的に展示する場所を作るとか、県の誇る美術評論家・瀧口修造のコーナーを作ったらどうか等々の意見を出し合い、改修のときにそれらが実現され、常設展示の部屋も今のように随分増えたのです。

今回再び、魅力向上検討委員会が作られて、5回ほどの会合を踏まえた答申の内容がここにまとめてあります。入館者の増加がなかなか進まず非常に苦しい状況になりつつあるのを感じながら、どこがどう悪くてこうなるのかを常日頃考えていたのですが、やはり「何か分かりにくい」という声が非常に強かったと思います。

今度の検討委員会でも、それをどうしたらいいかということ、また、何となく敷居が高く近寄り難いのであればもう少し親しみやすくする、ということを中心にいろいろな案が出されたようです。この後、それを実際に具体化していくということが非常に大事なこと

ではないかと思えます。

ここにも書いてあるように、すぐに実行できることと、少しロングレンジで見ることと、両方の改革を着実にやっていけば、より皆さんに来ていただける美術館に近づくのかなと思えます。

ただ、その場合、基本として必要なのは、みんなが親しむからというので、あまり迎合するようなことはやらない方がいいと思えます。やはり品格を保ちながらということがとても大事なことだと思えます。

また、現在はパーマネントコレクションを作る予算がほとんどないような状況です。年間の活動費はあっても、コレクションを増やす予算は取れていないという状況だと思えます。企画展ばかりやるという美術館があってもいいのでしょうし、企画を回すというのでしょうか、ギャラリー的なものだけでやっていくという美術館もあるかもしれませんが、やはり美術館本来の姿としては収蔵ということも大事だと思えますので、これまでの基本方針を貫いて、コレクションというものも少しずつ増やせたら理想的だと思えます。

(会長) 何段階かの改善があるでしょうが、比較的早くに「少し変わり始めたな」と感じてもらえるように進んでいくといいと思えます。ぜひまた、いろいろと議論していただきたいと思えます。

○ 少し抽象的な形になりますが、二つばかりの意見を述べさせていただきたいと思えます。

国の第2次基本方針の中では、特に人材育成を大きく打ち出しています。例えば、今の近代美術館の問題に関しましても、「解らない、難しい」という話が出ているわけです。現在、文化・アートに関する広い意味でのリテラシーというものが非常に退化している。学校教育等々の中におきましても、芸術等に関しての教育が非常に退化していることもあって、難しいとか解らないという形で、芸術・文化に対して接触を持たない人たちが非常に増えてきているわけです。

ただ、文化において「解る」という言葉が、ある面で本当に価値があることなのかどうか。私の感覚からいけば、難しいが故に魅力があるわけです。解ってしまうものなら、日頃どこにでもあるわけで、テレビだとかその辺に存在するものを見ればいいわけです。文化や芸術に触れるということは、例えば人間の心の中にある自然な、ある意味では解りにくい感情だとか、あるいは運命の不思議さだとか、人知が及ばないようなさまざまな世界

に対して目を開くということが、文化や芸術が果たしてきた役割ではないかと思うのです。

今、そういったことに対する関心が消えていくという状況の中で、例えば個別の美術館が、あるいは個別の演劇祭や音楽祭などが対応していても、なかなか動かないだろうという気がしています。もちろん個別の文化活動や文化施設等々においても教育普及を大きな柱として取り組んでいく必要があると思いますが、人材育成については、国の方針、あるいは県や市といった、行政レベルのもっと広い形で考えていく必要があるのではないのでしょうか。その中には当然、学校教育等々における芸術文化に関する教育の充実ということもあると思います。

もう一つ重要だと思うのは、文化に関わる人材の中には専門家や観客などさまざまな人たちがいるわけですが、例えば文化施設などを管理・運営していく責任者であるマネジャーという人たちの教育が、非常に弱いのではないかという気がしています。

基本方針に関する検討のとき、指定管理者制度の問題も非常に議論になりました。「芸術文化施設において指定管理者制度はふさわしいのか」との点を疑問視する声はかなり出て、文化庁は最終的なまとめに当たり非常に苦労したようで、その辺は非常にあいまいな記述になってしまいました。指定管理者制度で言えば、指定管理者が民間であろうが従来型の行政出資による公益法人であろうが、その責任者が、どれだけのビジョンを持って、どのような地域にどのような文化を作り上げ、配下の専門家やボランティアらを活用していくのか、という能力や見識が今は非常に欠けているところに、大きな問題があるような気がして仕方がありません。

そこで、この審議会でどういう形で取り上げるのがよいのか分からないのですが、例えば、富山県において文化を支えていく中軸的な人材の育成です。これは、企業の経営者が入ってくるかもしれないし、行政の中の中堅管理職以上の方たち、あるいは地域で文化活動を長年行ってきた責任者の方、もちろん学校の先生など、さまざまな人たちが実際に地域の文化について考えて検討していくような機会づくりを進めていかないといけないのではないかという気がします。

○ 先ほど事務局から説明があった内山邸の保存改修により、内山邸本来の姿が蘇りつつあり、大変好評を得ております。私も、外国の方が来たときにはなるべく案内するようにしていますが、大変喜んでいただけます。

事業に関わった学生は、卒業後、現在取り組まれている岩瀬の町並みの修景のほか県内各地の再生などに携わっています。また、県外から来ていた学生も文化財の修復などに関

わる仕事に就職して活躍しており、富山から修復する人を輩出しているといえます。

また、高岡の御車山などが、なるべく地元の職人さん達の手で再生や復元を行おうとしておられるのは、良いことだと思います。そうした取組みが全国に発信されることにより、「高岡にはそういう物づくりの職人さんがまだ残っている」ということが知られ、他府県から仕事の依頼が来るという事例も現に発生しております。今まではなかなかPRしなかった、内山邸や町並み再生などの記事が全国版に出ることによって、逆によそから問い合わせや仕事に来る。職人さんは仕事がないと生活できませんから、そういった点で大変いいことです。

さらには、岩瀬に限らず八尾や高岡の町並みなど歴史的な町並みを残すことについて、国交省や文科省も含め、だいぶ積極的にやっています。あと、富山らしさという点では、これらの重要文化財化においては全国的にも大変評価できる県だと思いますので、そういったものが少しずつ取り上げられてきている。それも、内山邸などでやっていることが見えてきていることが大きいのではないかなと思います。

それと、今、ある建築賞の審査員を務めており、ある会社の50周年記念の建物を見せていただいたのですが、対象の建物は〇〇会社のビルなども含めほとんどは新築のビルでした。それも一つの文化だと思ったのですが、その中で、今あるビルをリメイクし今までとは全く違った形に再生するという事例が、審査会で大変評価されました。発表はまだですが。私は温故知新という言葉が一番好きなのですが、伝統的なものだけではなく、新しいものを造ったり、再生したりしていくという点でも、富山独自の文化の発信というものも、新建築においてできるのではないのでしょうか。

これからは、継承すべきことは継承しつつ、未来に文化財になるようなデザインを考えることで、富山から発信していける可能性が十分にあると思います。富山大学にも芸術文化学部ができましたので、そういった新しい部分の発信で、新建築においても十分な可能性がある県に育っていけば、とすごく感じています。

○ 県立近代美術館は、もとより素晴らしい美術館であり、子どもたちがもっともっと美術館と親しめるために協力できたらとの思いで、改めて勉強させていただき、感謝しております。また、「新世紀とやま振興計画」や各種事業の中に、子どもの美術や子どもたちに関することを随分入れていただいております、大変ありがたいと思います。

また、今年で2回目となる新しい展覧会「越中アートフェスタ」では、アートのお祭りに子どもたちにも参加してもらおうということで、審査対象となる本展の作品とは別に、

幼児や小学生に出品してもらっています。小さいうちから描く楽しさや作る喜びを感じて、そしてまたそれを多くの人に見てもらうことで、子どもたちの自信につながりますし、お父さんやお母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、一般の方にも子どもへの理解を深めていただければと思っています。去年は1500人の子どもの作品を展示したのですが、今年は2000件以上集まっており、12月1日からの展示に向けて準備をしているところです。子どもたちは社会の一員であって、その子どもを美術や教育の中で温かく見守ってほしいと思います。

ところで、私たちは、「夢の架け橋」と銘打ち、子どもたちがベニヤ板に色を塗って松川の塩倉橋に設置する、子ども版のパブリックアートに取り組んでおり、今年で5年目になります。実は、今日の北日本新聞にも載っていますが、2～3日前にその一部が壊されてしまいました。一人の心ない方の行動が多くの人を傷つけてしまうということ、善悪の判断、文化や教養といったことを理解させるためには、やはり小さいときからの教育が大事なのかなと思っています。私たちも、負けないでこれからも頑張っていきたいと思っています。

もう一つ、資料1（平成19年度の主な本県文化関係事業）の中に商工労働部によるデザイン関係の活動が載っていますが、県の総合デザインセンターは高岡市にあり、なかなか行く機会もないので、ここの活動が詳しく分かると思います。先ごろ亡くなられた黒木所長さんは大変素晴らしい先生で、富山の若者たちに素晴らしい影響を与えられました。先日、黒木さんに関する展覧会が高岡で短期間開催されたのですが、残念ながら富山ではありませんでした。先生の業績を紹介する機会がもっとあるといいと感じるとともに、これからの県のデザインセンターの方向性がどうなるのか気になっているところです。

○ 私はこれまで、過去に、多くの子どもたちを連れて海外に行く機会がありました。そのたびに、日本の芸術文化を持って海外に行き、多くの人たちにそれを見ていただき、いろいろな評価を受けることで、本当にたくさんを感じ、感動や感激を持って帰ってきています。

来年、この富山で「世界こども舞台芸術祭」が開かれることによって、さらに多くの子どもたちがそういう機会に恵まれることとなります。また、「演劇祭」でなく「舞台芸術祭」ということで分野が広がり、演劇にとどまらず舞踊、音楽と参加や関心がさらに幅広くなったと思っています。

また、今回は、いろいろな分野で県内の子どもたちが参加する機会をたくさん用意して

います。自分たちのやっている舞台芸術を通して、いろいろなことを伝えたり表現したりすることは、今の子どもたちにとってとても大切なことではないか思います。

また、先ほどから人材育成という言葉も出ていました。昨年、文化振興計画に関する議論の中で、子どもたちの芸術について、「大きくなってから身に付けるべきものもあれば、本当に小さいころから積まなければいけないというものもたくさんある」というお話をしたと思います。世界の芸術に触れて、自分たちが一つでも何か感じるものがあって、それがプラスになったらいいと思っています。富山の子どもたちにとってもいい影響を与えてくれるものと確信して、私も頑張ってまいりたいと思います。

○ 私は、正直に言って最近の国の文化に対する姿勢というものは非常に情けないと心底思っています。

特に財務省は、ある意味では当然といえば当然なのですから、国から何らかの援助を受けている限り何か成果を出せ、それも成果を数字で出せと言うのです。これだけ援助をすることでどんな数字で表れたのだと。国が援助したから入場者がこれだけ増えたとか、あるいは入場料をこれだけ安くできたとか、彼らはそういう数字的なことを言っているのだらうと思いますが、そのあたりは答えが非常に出にくいものです。というのは、文化的なものに関する良いとか悪いとかいう評価は、どうしても感性で見たり聞いたりして得られるものだと思うのです。それを数字に出せというのは、非常に無理があります。

そういう前提で、先ほどから富山県の文化振興に関する事務局の説明を伺っていると、知事を先頭として文化に対して非常に真摯に毎日をご経過しておられると感じ、非常にうらやましく思いました。

世界文化遺産の話題が出ておりますが、何とか立山・黒部が選ばれるように心から願っています。

○ 私は、文化事業とか文化というのは、やはり「人」が中心だと思うのです。それも、マスの「人」というのではなく、個別の「人」というものが大事だろうと思うのです。紹介されたいろいろな文化事業もすべて、どなたかが、あるいは何人の方が「これは絶対やるべきだ」「これはとても良いことだ」という信念を持ち、それをより多くの人に体験してもらうためにいろいろ努力をしておられる。そうした結果が伝わっていくことが文化事業だと思います。

今日ご紹介された事業すべての裏に「人」の存在が感じられて、もしかしたら素晴らし

い文化振興計画が生きた形で動き出しているのかもしれないという希望を持ちました。と言うのは、グローバル化のおかげで、人間の体や感性とかいうものを介在しないで情報だけがバツと広がって行って、固有の地域の文化とか固有の歴史の文化がどんどん平準化してってしまうという危機感を私たちは持っているわけです。それをもう一度、引き戻すのは、文化事業に携わる、そして文化を信じている一人一人の力ではないか、と思っております。そういう人がどんどん増えていくといいなと思っております。

ご紹介のあった内山邸も、江戸時代に農業をして実際に生きていた人たちの知恵を基にこういう建物ができている、ということが言えると思うのです。我々も、利賀で合掌造りの建物を劇場にして、そこで活動を長年続けています。豪雪地帯であるような合掌造りという建物を考え出し、それをずっと守ってきた人の知恵や苦勞の歴史の中には「人」がいる訳です。「文化というのは、やはり人だ」と結論づけられるのではないのでしょうか。そういう意味で、私も頑張りたいと思いますが、そういう人が富山県内にどんどん増えていくことを期待しています。

○ 文化庁では3～4年ほど前から「伝統文化こども教室」という事業を奨励しており、子どもたちに伝統文化を教える教室等に対して助成されています。子どもたちは、小さいうちはこうしたものに携わりますが、大きくなるとだんだんそれから離れていってしまいます。これを、どうしたら大きくなっても続けられるか、というのが今の私たちの課題です。例えば、昔は生け花とかお茶が学校の教科に入っていたのではないかと思います。今は、それらが必須の科目ではなくなったため、関心が薄れているのではないかと感じますので、部活動でも結構ですから、時間の許す限りそういうものをまた取り入れてもらえるとうよいと思います。

○ 先ほどの事務局の説明で、県の文化部門の予算がアップしていると聞き、富山県は期待どおり文化に対して温かいなと感じました。

その反面、市町村合併が進んで、予算が今までより大幅に削られ、なおかつ文化面に冷たい、という実態の市町村が多いのは事実です。特に、文化ホール関係において、教育への配慮がなされていない実態を少し心配しています。

「新世紀とやま文化振興計画」については、もう何も言うことはありません。大変だろうと思いますが、我々はその進捗状況を温かい目で見守っていかなければならないと思います。特に、以前にも申しあげましたが、文化事業で一番大切なことは、その事業がそれ

それぞれの分野における指導者の育成にどのようにつながり、その分野を発展させていくのかということだと思いますので、その辺を注視していきたいと思います。

例えば、私の関係する音楽分野で言うと、私の専門はクラリネットでしたが、中学や高校時代に管楽器をやりますと、ピアノやバイオリン、合唱の皆さんの後塵を拝し、いつも憧れの目で見ながら、肩身の狭い思いをして人生を送った経験が若いころにあります。

また、来年は、富山県吹奏楽連盟、北陸吹奏楽連盟がともに50周年を迎えます。その歴史の中では、「組織づくり」ということに最も心がけて、ボランティアで取り組んできたように思います。組織づくりは、他のジャンルにおいても大切だと思うのですが、最近、特に音楽や舞踊の分野では、収益が上がった場合の税金対策で悩んでいます。せっかく自主運営が軌道に乗って活動が盛んになってきたのに、演奏会を開いたら税金でガッポリ持っていかれるという状態が生じています。富山県の吹奏楽連盟ではまだそこまで来ていませんが、北陸レベルだともう来ています。教育としてやっているのになぜ税金を取られなければいけないのかと感ずるのですが、これからはいろいろな活動の中でそういう事態が生じてくるのではないかと思います。私の経験が何か参考になればと思い、お話ししました。

○ 内山邸の茶室の魅力を伝えるため、富山県芸術文化協会の機関誌「藝文とやま」に架空の茶会記を書いたことがあります。9月のある1日を設定し、その年のその日の天候を气象台に行って調べたりして書きました。その時、とても参考になったのが、内山量子（うちやま・かずこ）という歌人の歌日記でした。そのときは、内山量子という個人の素晴らしさだけでなく、近世からずっと内山邸が持っていた文化度の豊かさや深さをつくづく思い知らされました。

内山邸に飾ってある屏風の和歌をきちんと解説したものがあると良いと常々思っていました。例えば「内山通信」というような形などで、そうした内山邸の中身について紹介する事業があったらいいと思います。

○ 事務局の説明の中で、全国の課長会で富山県の文化度がトップクラスの評価をいただいたというお話を、とても嬉しくお聞きしました。

本県では過去7回、国際的なアマチュア演劇祭を開いてきております。近年、こども演劇祭ということで、子どもを対象に、いわゆる次代を担う、そして先ほど他の委員もおっしゃったように、感性の豊かなといいましょうか、吸収しやすい時期にそういった芸術文化に携わる子どもを対象とした芸術文化活動をしていただくということが、今後、未来に



向けて、とてもいい事業ではないかと信じております。

また、そういう子どもの時期に国際的な催しに参加して、いろいろな国の人とお友達になって、そのお友達の国とは将来的にけんかはしないではないか。いわゆる平和な世界が築けるのではないかという信念を持って、こういった事業に携わっております。

本県では、国際アマチュア演劇祭を過去7回開催しましたが、1回目は1983年でした。アジアで初めての演劇祭をやろうというときに、大韓航空機がサハリン沖でソ連に撃墜される事件があり、パニックに陥りながらも、第1回を開きました。その時に、今年1月に亡くなったアメリカのモート・クラーク教授が富山に来られまして、「政治と宗教は人を分けるが、芸術は人を集める」とおっしゃいました。世界的にテロをはじめ様々な事象が起きていますが、世界が平和で、そして芸術文化を多くの方が楽しめるような時代になればいいと思っています。

○ 少し自己紹介をさせていただきますと、10年ほど前から文芸活動の企画運営をやっております。最初は「富山県内で詩の朗読を生で聞いてみたい」という小さな思いから出発し、後には、詩人の谷川俊太郎さんをお招きして、詩と音楽のコラボレーションを実施することができました。また、それと並行して、私は絵が好きなものですから、一編の詩を提示して、県内作家の方々のご協力いただき、「移動美術館」と名付けた作品展をやらせていただいております。

私は、とにかく現場に立ってみることが大好きなのですが、近代美術館もその作品にすぐ興味があり、年に2～3回ぐらい行っています。先日も、リニューアルした富山市科学博物館の「発明王エジソン展」を拝見した際、前の広場に立ってみると、紅葉がとても美しく、良い場所だと改めて感じると同時に、この素晴らしさを何とか生かせないものかと考えました。富山県内には、総曲輪フェリオなどもできてきましたが、静かなデートコースがあまりないのではないのでしょうか。若いカップルとか、昔恋人だったシニア世代とか、今も恋人かもしれません、そういう方たちに来てもらえるような場所にならないかと思いました。

○ 先ほど他の委員が「現場に立ってみる」と言われましたが、世界こども舞台芸術祭をはじめとする国際アマチュア演劇祭は、行ってみないと分からないのです。ちょうど、行ったことのない国の事を伝えるのは難しいように、口でいくら言っても駄目なのです。ここにお越しの方で、そうした機会が今までなかった方は、世界こども舞台芸術祭の催物に

是非ご参加をお願いします。

また、国際アマチュア演劇連盟の理事会に参加する機会がよくあるのですが、そこでいろいろな人と知り合いになると、プロとアマチュアに関する観念がいかにか日本と違うかということがよく分かります。例えば、もともとアマチュア演劇の伝統の強い北欧などが中心の理事会に行くと、アマチュアに対するわれわれの考え方が随分違って、アマチュア・プロと言っていること自体が恥ずかしいと感じたことがあります。そうした意味からも、こども演劇祭などの意義は計り知れないと思います。

もう一つ私が言いたいのは、文化審議会でも2～3回言ったことがあります。我々の県単位での文学館の必要性です。県芸術文化協会では、先ほど他の委員が触れた「藝文とやま」という記録誌的なものと、「とやま文学」という文学雑誌的なものを毎年出しています。例えば、「とやま文学」は非常に多才な人材を集めているのですが、いかんせん知らない人が多すぎます。一方で、そういう雑誌はどんどん増えています。今、富山には同人誌が約10誌あり、その書き手として、小説家とっていい人や、そうでなくても頑張っている人を含めて100人弱います。そうした雑誌を収蔵したり、そういう人たちが気楽に集まったり、自分たちの資料を管理したり、一方では従来の富山の文学の歴史といったものを閲覧できるような、富山文学館というような施設を小規模でもいいから設置することを私は諦めていません。

先ほどから話が出ている内山邸には、私もお邪魔したことがあります。職芸学院の学生たちが一生懸命作業をしていました。あの辺に行くと、東京では考えられない良い環境の、例えば1～2部屋の小さな文学館はあつという間にできるのではないかという気がします。しかも、置いておくだけだから、そんなに金は掛からないと思います。新たな年度に向けて、そういったことが実現できればと思います。私はあちこちの文学館を巡っていますが、例えば東京の文学館あたりとはコンセプト、考え方やアプローチが違ってしかるべきだと思います。

○ 12～13年前、第3の県民会館として、新川文化ホールという素晴らしい施設を造っていただいたのですが、素晴らしいが故に清ましているような感じでした。一般の県民、市民にどうやって交わって使っていくのかということで、初代会長が、「企業から1年間に1万円ずつ会費を集めて、土曜日にロビーで無料コンサートをやろう」という企画をしました。

当時魚津市にあった洗足学園魚津短大の先生や生徒たちの発表の場にもなると、学校か

らも喜んでもらえました。会費は、第企業も、うちの隣の酒屋さんも1万円ということで、120～130社から集めました。このことは、いろいろなところに誇れるものと思っています。しかも、このお金でピアノを購入し、文化ホールに寄附することになったのです。「ミュージックランチ」と銘打って土曜日にロビーで無料コンサートをするのですが、そのためにまさか大ホールにあるスタインウェイなどの立派なピアノを引きずり出して来る訳にもいかず、「この予算でピアノを買おう」ということになりました。公立文化ホールに市民がピアノを寄付した例は、他にないのではないのでしょうか。洗足学園さんのご厚意で、かなり安い価格のうえに分割払いにしてもらって購入したピアノは、今でもミュージックランチで活躍しています。

私はこういうことが好きなのです。残念ながら私は生前のゴールドベルク氏にお会いしていませんが、「こういう方が富山県にいたことは、富山県の財産だ」と言われ、「そうなのか」という気になり、音楽が好きなのですから「何かお手伝いできれば」という気持ちで、去年は奥さんから詳しいことをいろいろお聞きしながら、お世話をするようになりました。

県や市町村から補助をもらい、県内企業からお金を集めていろいろなことをやっていますが、私は経済人なので、「これは何のために、誰のために役立っているのか」ということを、やりながらいつも考えてしまいます。先ほどからの皆さんのご発言を聞いていると、文化ではそういうことを考えてはいけなかな、という気もしました。それはともかく、そうした自問自答をしながらも、来てくれる先生方や生徒さんに「また富山に来たくなった」と最後にひとこと言われると、苦労はすべて消えてしまい、「また来年もやらなければいけないのかな…」と。

(会長) 私も、委員の一人として少しだけ話をさせていただきます。

1年目というのは、検証するといってもなかなか難しい部分があります。従って、今日は「あれはあまり進んでいない」等々という話は出てきていません。しかし、委員の皆さんが定点観測、定点チェックをどんどんしてくださると非常に良いと思います。その上で、予算化された事業が資料1の中に太枠でくくってありますが、これが2年目、3年目、4年目、5年目に、本当に目標に近づいているのかどうかをしっかりとチェックしていきたいと思います。

今後10年間の文化行政について我々がいろいろと議論したことを踏まえて作られた計画であり、なおかつ我々はそれをチェックするという立場であるならば、その年その年で

いろいろな事業が行われるとしても、全体として本当に目標に近づいたのかのチェックをしっかりとやっていかなければなりません。

しかし、7つの資料を拝見し、その報告を伺い、また、事務局から「富山県は三つのうちの一つに入っていた」ということを聞くと、なかなか良い計画になったのかなと思います。後は、その計画がきっちりと実行、実現できるかに懸かっているのだと思います。

話は少し変わりますが、私は、数カ月前に国土交通省の観光の審議会のメンバーに選ばれ、7回ぐらい会合がありました。国の観光振興であれ、富山県の文化振興であれ、結局同じ事だと思っております。つまり、国レベルであっても、地方のどのレベルであっても、とにかくコンテンツがしっかりしていなければならない。「どのようにコミュニケーションするか」「どのように発信するか」「どのように人を来させるか」ということばかりをやってみても、リピーターにならないければ意味がない。1回来た人が「面白かった」とか「美術館がすごく良かった」とほかの人に言ってくれば、また来てくれると思うのです。そうでないと、それきりになってしまう。やはりコンテンツをしっかり作り上げることが、コンテンツの大小やレベルの問題はありますが、非常に貴重なのではないかとその会合ではずっと言っていました。

そういう意味では、まだ十分に出来上がっていない部分もあります。新世紀とやま文化振興計画の期間は10年ですが、5年間ぐらいで「富山県の文化行政は、何か変わってきたね」と言われるようなことがある程度できればいいな、というのが、前の議論のかなり中核的な部分だと思っています。

また、各委員がそれぞれの立場で取り組んでおられる事業が、非常に面白く進んでいる、また、これから進むのではないかとこの部分がいろいろありますので、これらをみんなで大いにサポートし、それを実体験して、宣伝というか、周りの人に言っていけないと思いません。

「文化」という言葉は裾野が広すぎるので、なかなかまとめにくいのですが、委員の皆さんには、私も含めて皆さんがずっと委員をおやりになるか分かりませんが、これから厳しい目でウォッチしていただき、県行政に対して「年を追うごとにだんだんバーが高くなっていきますよ」と厳しくハッパを掛けたり、一緒になってサポートしていただければいいな、と思っております。今年は1年目ですから、今のところは非常にいい動き方になっているのではないかと私は感じました。

(会長) 予定の時間が迫ってまいりましたので、本日の議事はこれで終了したいと思います。委員の皆様には、大変貴重なご意見をありがとうございました。また、議事の進行にご協力をいただきましてありがとうございました。

#### 4. その他

会長からは、「厳しく見ていかなければいけない」というお言葉の一方で、サポーターになっていただけるというようなご発言もありました。

また、子どもの施策について、今日もたくさん意見が出ましたが、昨年来の文化審議会でも「子どもの施策というのはやればやるほど良い」「子どもを子ども扱いしてはいけない」という意見が多かったと思います。去年の文化審議会も、子どもの施策にかなり力を入れてやらなければいけないという意識でやっておりました。

子どもの施策をきちっとやりますということだけをまず申し上げたいと思います。

また、先ほどから人材育成の話が出ていましたけれども、やはり文化振興というのは人間振興。文化というのは広い意味で人の人生を豊かにするもの、文化の力というのはいろいろな面に出てくると思います。まず、人生を豊かにするもの。それから、文化の力は地域をまとめる言葉になるのではないか。それから文化が商品価値、産業面でとらえても商品価値を高める力。文化のいろいろな力があると思いますので、その文化の力を一つずつ引き出すのが文化行政の仕事だと思っています。広い意味でとらえていきたいと思っています。

最後に、今のご意見はいろいろなヒントになりましたので、県が進めるに当たって、今日いただいた意見を頭に入れ、参考にして、何らかの形でぜひ生かしていきたいと思えます。今後ともご支援をいただければと思います。

本日は大変ありがとうございました。

#### 5. 閉会

(事務局) それでは、これで本日の文化審議会を終わらせていただきます。皆さま、どうもありがとうございました。